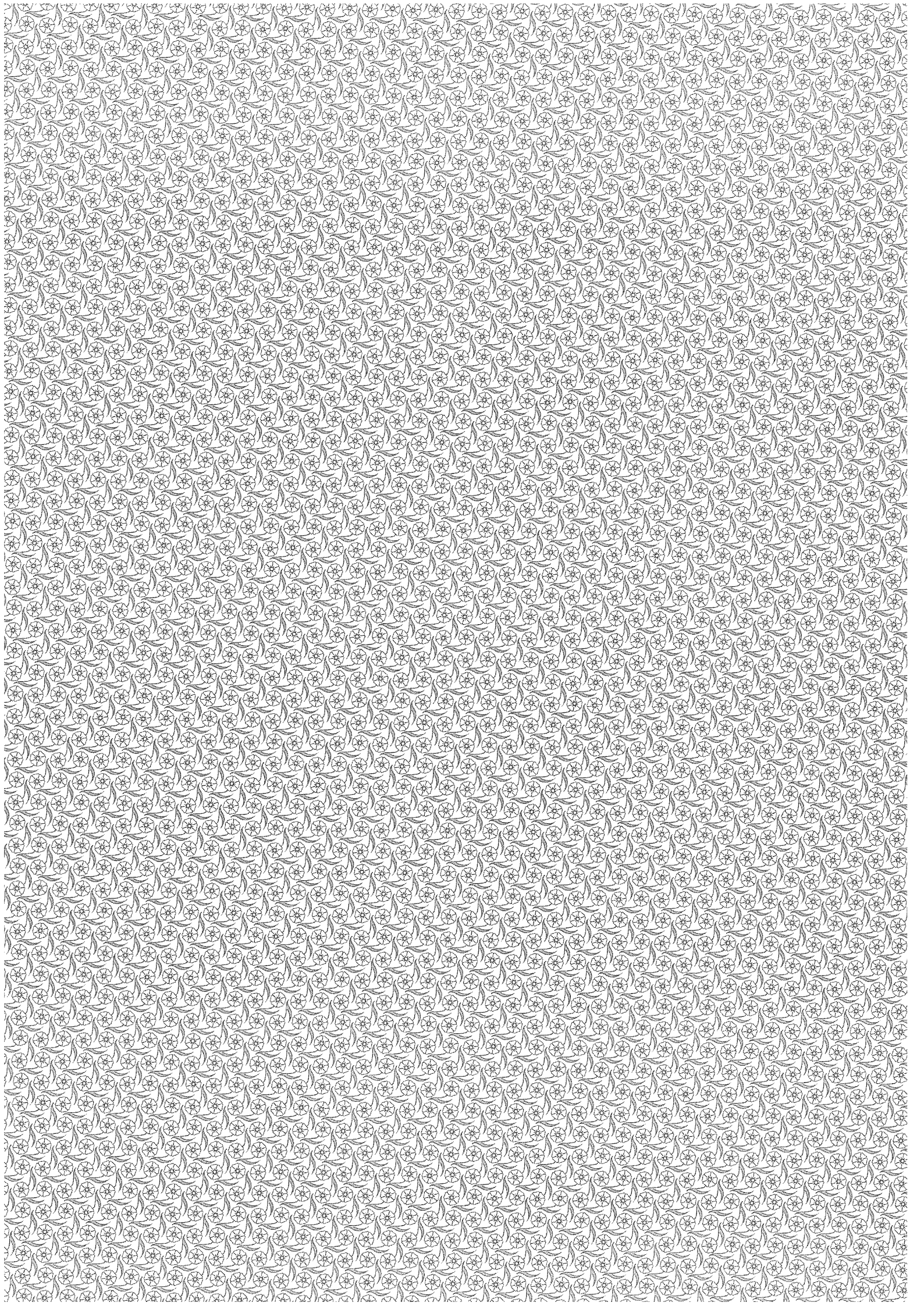


国語

注 意

- 1 問題は **1** から **4** まで、16 ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙に明確に記入し、解答用紙だけを提出しなさい。
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のア・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号を書きなさい。また、答えに字数制限がある場合には、**、や**。**や** などそれぞれ一字と数えなさい。
- 6 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 7 受検番号を解答用紙の決められた欄に記入しなさい。



1

次の各文の――を付けた漢字の読みがなを書き、かたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) さわやかな日和となる。
- (2) 仕事を少人数で賄う。
- (3) 論理の破綻を避ける。
- (4) 肥沃な土地でたくさんの作物が育っている。
- (5) 不完全ネンシヨウのまま終わるわけにはいかない。
- (6) 今年の文学賞をとった作品のヒビヨウを読む。
- (7) キキッパツのところで何とか難をまぬかれた。
- (8) 懸案課題のゼンゴサクを検討する。

2

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

マレン・セイと名越俊也^{なごえしゅんや}は、同じ高校に通う仲の良い二年生である。マレンはアメリカ人で吹奏楽部に、名越は演劇部に所属している。ある日、マレンは名越から、小学生に逆上^{さか}がりを教えてほしいと頼まれ、手伝うことにした。

僕はここでいったいなにを？ と疑問を持つのは、名越と関わっている時点であきらめるしかなさそうだった。しかし、学校と部活から切り離された空間というのは、ずいぶんひさしぶりの気がした。子供たちに逆上^{さか}がりを教えていたマレンは、床に落ちた小さな紙の切れ端に目を留める。体育館の空調から吹きこむ風にあおられて舞い上がり、くるくると旋回して、ひらひらと床に落ちていくさまを見つめた。

小さな紙の切れ端になにかが印刷されていた。既視感を覚えて指でつまみ上げる。

以前、演劇部の部室で名越の額に貼りついていた絵柄だ。^{*}ハンドベルと思っていたが、冷静に眺めると、ハンドル部分がないベルだとわかった。そして数字がある。

近くにゴミ箱がないのでジャージのポケットに入れると、鉄棒でフン喰^くる男の子に近づいた。参加者の中で達成が一番難しそうな子だった。事前に名越が全員に配ったチェックシート通りにやらないし、腕が伸びきっているからひと目でわかる。

「まずは両手の間に両足を通す、足抜きまわりからはじめてごらん。」⁽¹⁾
男の子の二重の目^めが動いて一瞬こつちを向いた。手本を示すと、黙っ

てうつむいてしまう。吹奏楽でも、教えを請うのが苦手なのは男子が多い。丸投げの女子にも困るが。

「あっちの練習もいいよ。」

マレンは指を差した。そこでは名越が子供たちを集め、マットの上でゴロゴロと後転の練習をさせている。後ろまわりという意味では、逆上がりと基本的に同じ運動だ。自宅でもできるから、理にかなった練習方法かもしれない。「へそ見てまわれ。」とか「背中を伸ばすな。」などと、^{*}口角泡を飛ばし、前のめりで周囲をねじ伏せるような彼の舌鋒は健在だった。それでいてなぜか嫌われない。そもそもさっきの喧嘩でも垣間見たが、彼は自分が笑われたり反抗されることに鷹揚^{*おうよう}なのだ。往々にして、でたらめであやうく、そしてろくでもない。波風立てずに生きていく^{*}としていたマレンとは対照的に、真似^{*まね}のできないクレイジーさというか、器^{たち}というべきか、佇まいがある。

鉄棒を両手で握る男の子に視線を戻す。彼は悔しそうに口を曲げていた。それから顔をぷいとそむけ、だれにともなくつぶやく。

「……なんで、逆上がりなんて。」

マレンも不思議に感じていた。アメリカに住んでいたとき、体育の授業でやったことがなかった。逆上がりの強要は日本独自の風習に思える。

男の子に、どう言葉をかけようか迷う。

吹奏楽部の穂村^{*ほむら}が、譜面^{ほむら}の調について、なんで覚えなければならぬのか、と初心者らしい素朴な疑問を投げたことに通じるかもしれない。「あのさ。」と、マレンは屈^{かが}んで男の子に話しかけた。「逆上がりはできなくてもいいんだよ。」

男の子は顔を上げた。その目に驚くような気配があった。数秒間、視線がマレンの顔に留まっていた。まわりにいる子供も救いを求めるように次々と反応する。子供のまつすぐな視線、心を隠すことが身についていない視線をはじき返すのは苦労⁽²⁾が要る。下手なことはいえなくなったとマレンは緊張した。

「逆上がりができないまま大人になっても、たいして困ることはないと思う。」

男の子は身を乗り出して、「や、やらなくていいよね。」と急に声を弾ませる。「だいたい船が海の真ん中で沈んだり、飛行機が落っこちたとき、逆上がりなんてなんの役にも立たないもん。」

「それはいえる。」

「だよね。」

「リコーダーや、読書感想文や、縄跳びだって、役に立たなかったり、大人になってから必要のないものばかりだよ。だからといって、やらなくていいって考えちゃうと、自分で将来の道をどんどん狭めてしまうことになるんだ。できなくてもいいけど、やらなくていい、というのはもったいないな。」

きつと草壁^{*くさかべ}先生ならこういうだろう、と思つて慎重に喋^{しゃべ}った。

世の中は、無用^{*}の長物ほど美しい。サックスを教えてくれた父親の言葉もよみがえる。

男の子はむくれたように下を向いた。しばらく沈黙がつづいた。やがて、不服そうに唇^{くち}を尖らせて、「……結局、やらなきゃ駄目^{とが}ってことじゃん。」

「駄目じゃないけど、やってみなければ、そこに追い風が吹くのか、向かい風が吹くのか、風がないのかもわからないよ。その点、きみはちゃんとやっている。」

「きみ？」

「そう。」

「ぼくのこと？」

「ああ。」

男の子はすこし照れた様子を見せた。かたく突っ張っていた心がぐにゃつと曲がった。そんな印象を受けた。「やつてもできないよ。」

I

「……うん。」

「まだ吹いてる？」

「うん。」

「もう一回、やってごらん。」

「えー。」

マレンは一步退いてスポーツタオルを取り出した。男の子の背中から脇を通して、両端を鉄棒と一緒に握らせる。スポーツタオルが男の子の腰を支えることで、身体が鉄棒と密着し、今度は嘘みたいに簡単にまわれた。

「ほら、できた。」

男の子はツボにはまったのか、感情の高まりを覚えたのか、⁽⁴⁾「なにこれ、ずるいよ、これ。」とキヤッキヤと笑った。スポーツタオルを補助ベルト代わりにし、楽しそうに逆上がりをつづける。

「これなら、いつでも、どこでも、逆上がりが最後までできるようになるよ。ずるくても、この感覚を忘れないようにしよう。ちよつとしたコツは、きみの苦手を丸ごと変えちゃうかもしれないんだから。」

男の子の持ち物でマグタイプの水筒があった。マットの上に転がっていたので安全な場所にどける。水筒の底に書かれた小さなローマ字を見た。AKARI。後藤朱里。姉のお下がり……。やはりこの男の子は吹奏楽部の後輩の弟のようだ。思いもよらない場所で縁ができたことを知る。ぼくも、わたしも、とまわりにいる子供もタオルを使つて真似をした。コツがわかると楽しくなり、楽しくなるとさらに奥が深いことを知る。はじめて自力でできたのが嬉しそうで、顔中に笑みが広がり、くるくるまわっている。

（初野晴「ひとり吹奏楽部 ハルチカ番外篇」による）

〔注〕 ハンドベル——柄の付いた小型の鐘。

口角泡を飛ばし——激しい口調で話すさま。

舌鋒——弁舌が鋭いこと。

さつきの喧嘩——子供たちが名越の挑発に対して親しみをこめて飛びかかっていったこと。

鷹揚——小さなことにこだわらず、ゆったりしているさま。

穂村——吹奏楽部の二年生。

草壁先生——吹奏楽部の顧問。

無用の長物——あってもかえってじゃまになり、役に立たないもの。

マグタイプの水筒——取っ手の付いた円筒形の水筒。

〔問1〕 本文の内容や表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 本文はマレンの視点だけではなく、男の子の視点からも描くことによって、二人の心情を偏りなく表現するとともに、男の子の回想と未来への思いを描くことでゆれ動く男の子の心情が暗示されている。

イ 本文はマレンと名越だけでなく、男の子や他の子供たちの視点からも描くことで、教える側と教わる側の心情を対比させ、マレンと名越の言動によって変化する子供たちの心情が象徴的に表現されている。

ウ 本文はマレンの視点を中心として描かれているが、名越の視点も取り入れることで、それぞれの子供たちへの接し方の違いが明らかとなり、逆上がりをめぐって二人が競い合う過程が浮かび上がってくる。

エ 本文はマレンの回想を差し挟みながら、マレンの視点に寄り添って描かれているが、過去形を基調とした文の中に現在形の文を配置することで、物語の展開がより生き生きと感じ取れる表現になっている。

〔問2〕⁽¹⁾ 男の子の二重の目が動いて一瞬こっちを向いた。手本を示すと、黙ってうつむいてしまう。とあるが、この表現から読み取れる男の子の様子として最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 足抜きまわりからはじめては逆上がりは上達しないだろうと思いつながら、マレンに代わって名越に教えてもらいたいとも言い出せず、何と言おうか困っている様子。

イ マレンから手本を示されても試みようと思わず、かといって自分にもできそうな他の方法を聞いてみようと思ひまま、自分でもどうしたらいいかわからない様子。

ウ 練習しても逆上がりができなかったので練習をやめようと思いつているが、教えてくれるマレンの気持ちを考えると、やめたいとも言ひ出せないで迷っている様子。

エ できそうもない足抜きまわりを強要しておきながら、できないと判断すると名越の練習方法をすすめるマレンの態度にとまどい、不自信感を抱きはじめている様子。

〔問3〕⁽²⁾ 下手なことはいえなくなったとマレンは緊張した。とあるが、

マレンが「緊張した」わけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 自分たちの指示に従わずに練習を続けているのを見て、逆上がりはできなくてもいいと思わず言ってしまったが、代わりの練習方法も思いつかず、どう指示したらいいか分からなくなってしまったから。

イ 逆上がりができなくてもいいと感じていたが、できたほうが可能性を広げるので、練習を続けさせたいという思いを持って、自分の言葉に注目する子供たちの真剣なまなざしに向き合うことになったから。

ウ 強要されて練習をするのでは意味がないと感じていたので、できなくてもいいと言ったが、名越が着々と練習を進める様子に刺激され、何とかして名越よりも上手に教えたいという競争心が生まれたから。

エ いくら練習しても逆上がりができない男の子を前にして、練習をやめさせようと思つて、できなくてもいいと言ったが、自分の発言に同意して他の子も練習をやめてしまいかねない様子を見せたから。

〔問4〕⁽³⁾ 男の子はすこし照れた様子を見せた。とあるが、このときの男

の子の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 逆上がりの練習を続けてきた自分の姿勢をマレンに認めてもらえたことが意外であるとともに、うれしいとも感じている。

イ 「なんで、逆上がりなんて。」という言葉に思いがけずマレンが同意したことを、マレンに肯定されたと感じて喜んでいる。

ウ 参加者の中で達成が一番難しそうだと判断した上でマレンが自分に逆上を教えていることに、気恥ずかしさを抱いている。

エ 自分なりの練習方法を変えずに続けていけば逆上がりができるようになる、とマレンから認められたことを誇らしく思っている。

〔問5〕 空欄 I に入る表現として最も適切なのは、次のうちではど

れか。

ア 「風が吹くかもしれない。」

イ 「追い風だ。」

ウ 「向かい風だ。」

エ 「風はない。」

〔問6〕「なにこれ、ずるいよ、これ。」とあるが、このときの男の子の⁽⁴⁾

気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア スポーッタオルを使った方法で逆上がりができたが、それでは自分の力でまわったことにならないので、後ろめたさを感じている。

イ 逆上がりが簡単にできる方法を知っていたのに、できそうもない足抜きまわりから練習に入ったマレンを意地悪だと思っている。

ウ ずるいと自分でも認める練習方法を他の子供たちにもすすめようとするマレンに、秘密を共有するような親近感を持ちはじめている。

エ 上達する糸口をつかんで、それまでできなかった逆上がりが簡単にできたことに驚き、達成感とうれしさで気持ちが高ぶっている。

〔問7〕 マレンと名越の逆上がりの教え方について、共通していると考えられることを、解答欄の「こと。」に続く形で、四十字以内で書け。

〔問8〕 「や、やらなくていいよね。」とあるが、あなたが男の子だとし

てこの本文に描かれた出来事があった後に、マレンにどうしてあの時そう言ったのかを振り返って説明するとしたら、どう言うか。
あなたの話す言葉を、七十字以内でまとめて書け。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

雪氷学せつひょうがくのパイオニアで洒脱しやだつな文筆家でもあった中谷宇吉郎なかやうきちろう（一九〇〇

～六二）は、書画の心得もあり、「雪は天から送られた手紙である」という文句を好んで揮毫きこうした。⁽¹⁾手紙という文化が廃れつつある現代にあつてはピンとこないかもしれないが、彼の業績を知れば言い得て妙の比喩である。

この言葉は、一九三八年に上梓じやうしされた『雪』の末尾にある、「このように見れば雪の結晶は、天から送られた手紙であるということが出来る」に由来している。その意味は、地上に舞い降りてきた雪の結晶を観察すれば、その雪が形成された上空の気象条件が推測できるというものだ。この理屈から中谷は、実験室で再現したさまざまな気象条件の中で人工雪を作り、その形状から大気上層の気象条件を推定できるグラフ、中谷ダイアグラムを作成した。^{*}

と書くと、いかにも理詰めの研究に聞こえるが、「雪雑記」（一九三七）と題された随筆では、「しかし実のところは、色々な種類の雪の結晶を勝手に作って見ることが一番楽しみなのである」と書いている。おもしろいから研究をするというこの精神が、一九三六年の世界初の人工雪作りの成功につながったのだ。

この歳としになると記憶が定かではないことが多いが、ぼくが中谷の文章に初めて触れたのは中学生のときだったと思う。それは、科学にまつわる複数の著者のエッセイをまとめた生徒向けのアンソロジーに収められ

ていた「立春の卵」（一九四七）だった。一年に一度、立春の日だけに生卵が立つという話である。いやもちろん、そんなことはない。立春の日以外にも卵は立つ。少し根を詰め、平らな表面の上でうまく重心を取れば、卵はぴたりと直立する。学校の図書館で見つけたその本を一読後、ぼくは早速それを試してみた。今でも家族が会うとその話で盛り上がるから、この記憶に間違いはない。

それはともかく、ここでその話を持ち出したのは、中谷の「立春の卵」が、科学的な考え方とはどうあるべきかを端的に教えてくれると思うからである。

中谷は、「立春の時に卵が立つ」という話は、近来にない愉快な話であった」と書き出している。一九四七年の立春にあたる二月三日、「立春の時に卵が立つ」という中国の故事を検証すべく、ニューヨーク、上海、東京の中央気象台などで実験が行われ、いずれも成功したというのだ。それが未知の現象によるものだとしたら大発見につながる立証実験であるとも書いている。⁽²⁾しかし、新聞報道で紹介されている説明がどれもみな承服じやうふくしがたい上に、「今年はまだ駄目だが、来年の立春にお試し」あれという書きぶりがいただけないという。つまり、卵が立つのはほんとうに立春の日だけなのか、その大前提への疑問が提起されていないことが「一番厄介」だというのである。

そこで中谷は、すでに立春を過ぎた日に再現実験を試み、卵を立てることに成功した。そこで卵が立つ力学についてしばし蘊蓄うんちくを傾けた後、この逸話のキーポイントに触れて話を結んでいる。

こういう風に説明してみると、卵は立つのが当たり前ということになる。^{すくな}。少くもコロナプス以前の時代から今日まで、世界中の人間が、間違つて卵は立たないものと思つていただけのことである。世界中の人間が、何百年という長い間、すぐ眼の前にある現象を見逃していたということが分つたのは、それこそ大発見である。(略) 立春の卵の話は、人類の盲点の存在を示す一例と考えると、なかなか味のある話である。これくらい巧い例というものは、そうざらにあるものではない。

⁽³⁾ 中谷はこの逸話を、とんだ盲点を突いた「愉快な話」と表現しているしだいである。しかしこの逸話からは、もつと一般的な教訓が引き出せる。すなわち、新聞各社は、中国の故事を立証する再現実験に成功したことを伝えている。ところが、簡単に実施可能な反証実験には思いも至らなかった。これこそがまさに、一般人の科学リテラシーの盲点なのではないのか。

科学リテラシーとは、文字どおりに翻訳すれば「科学の読み書き能力」である。ふつうは、科学の「知識」とか「素養」と説明されている。しかし、科学全般の知識に通じ、宇宙のダークマターからゲノム編集まですらすらと説明できる人などめつたにいないものではない。たいていの人は、中学、高校で習った「知識」すら、卒業と同時に頭から霧消してしまっているはずだ。それを取り上げて、一時、理科離れということが言われた。だが、問題はもっと根深いところにあると思われる。上っ面の知識を覚えていることが科学リテラシーの本質ではないはずなのだ。む

しろ大切なのは、科学的方法とは、科学的な考え方とはどうあるべきなのかを理解していることであるべきなのである。

人は、自分や家族が難病に侵されたなら、より効果的な治療法を求めようとする。そのとき、正しい情報を集められるかどうかで治療の成否が左右される。そこでニセ科学にだまされることなく、正しい「勘」をはたらかせられるかどうか、そこで科学リテラシーの有無がもの言うに信じたい。要は、必要なときに必要な情報を集められる力も科学リテラシーなのではないのか。

話は、それほど深刻な事態に限らない。⁽⁴⁾ 世には、あまたのニセ科学がはびこっている。そういう輩のロジックには、どこかしらほころびがあるものだ。その矛盾を見抜き、たやすくだまされないための抵抗力、いふなれば免疫力、それこそが科学リテラシーを身に付けることの効能であるべきなのだ。

立春の卵の逸話を戻そう。海外での検証実験実施の情報に推され、日本でも実験に及んだ。しかしその内実は、単なる話題作りに終わった。中谷がこれを話題にしていなかったとしたら、そのまま忘れ去られたかもしれない。

ともあれ中谷の戒めは確実に伝承されている。彼の出生地である石川県片山津の小学校では、二〇年以上前から毎年立春の頃に卵を立てる実験授業が実施されているというのだ。地元の高校生が学園祭で小学生との「卵立てバトル」を企画したこともあるようだ。子供たちは、卵を立てるというゲームに興じる中で、その背景をなす逸話を学び、科学的とはいかなることかをしっかりと実感しているはずである。

(渡辺政隆「免疫力としての科学リテラシー」による)

〔注〕

雪氷学——氷及びその降水、堆積形態である雪を対象とする学問。

洒脱——俗っぽくなくさっぱりしていること。

揮毫——文字や書画を書くこと。

上梓——書物を出版すること。

中谷ダイアグラム——横軸に温度、縦軸に水蒸気過飽和度を

をとって、雪の結晶形との関連を描いたもの。

中央气象台——氣象庁の前身。

蘊蓄を傾けた——自分の学識・技能の精一杯を発揮したということ。

反証——相手の主張に証拠を挙げて否定すること。

ダークマター——暗黒物質。銀河系や銀河の間に大量に存在すると考えられているが、光や電波・X線などでは全く見ることでできない物質。

霧消——霧が晴れるように、あとかたもなく消えうせること。

輩——仲間。

ロジック——論理、議論の筋道。

〔問1〕⁽¹⁾ 手紙という文化が廃れつつある現代にあつてはピンとこないかもしれないが、彼の業績を知らば言い得て妙の比喩である。とあるが、「言い得て妙」と筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 地上に舞い降りた雪の結晶には人工雪を作るための多くの情報が入っており、「天から送られた手紙」というたとえによって、未知の科学的知識が得られることを奇妙に表現しているから。

イ 現代科学では雪の結晶についてつぶさに解明されているが、「天から送られた手紙」という古風な比喩表現を用いることで、当時の偶然の発見に対する喜びを懐古的にたとえているから。

ウ 雪の結晶を観察してさまざまな上空の氣象条件を推測できることを、「天から送られた手紙」とたとえて、中谷自身が楽しく人工雪を研究していることを上手に表現しているから。

エ 人工雪を作るための中谷ダイアグラム作成にあたり、雪の結晶を「天から送られた手紙」と表現することによって、人知を超えた現象を研究することの困難を暗示的にたとえているから。

〔問2〕⁽²⁾ しかし、新聞報道で紹介されている説明がどれもみな承服しが

たい上に、「今年はどう駄目だが、来年の立春にお試し」あれという書きぶりがいただけないという。とあるが、中谷が「いただけない」と述べるのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 立春の日に卵が立つという中国の故事を立証するため、世界各地で実験が行われたが、新聞報道は立春にだけ実験することを促している書き方だから。

イ 立春の日に卵が立つという中国の故事を実験することはいいのだが、新聞報道は大都市だけで行われて日常的な空間を除いたことを肯定した書き方だから。

ウ 立春の日に卵が立つという中国の故事を適切に立証したことはよいのだが、新聞報道は未知の現象によるものと結論づけたことを肯定した書き方だから。

エ 立春の日に卵が立つという中国の故事を実験したのがたった数か所な上に、新聞報道では翌年は誰も覚えていないということを前提とした書き方だから。

〔問3〕⁽³⁾ 中谷はこの逸話を、とんだ盲点を突いた「愉快な話」と表現し

ているしだいである。とあるが、中谷はどのようなことが「愉快」であるとして説明しているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア コロンブスの時代から卵は立たないと思ひ込み、卵を立たせる実験を怠っていたということ。

イ 力学的説明ができない現象を誤って解釈して、世界中の人が大発見と思ひ込んだということ。

ウ 大昔から現在に至るまで、よく見られる現象を中谷自身が見逃してしまっていたということ。

エ 日常起こりうる当たり前の現象を、現在まで誰もが見逃していたことに気づいたということ。

〔問4〕⁽⁴⁾ 世には、あまたの二セ科学がはびこっている。とあるが、筆者

の述べる「二セ科学」の例として適切でないものは次のうちではどれか。

ア 「身につけていれば幸運を呼ぶとうたわれているもの」があるとして、それを身につけているので幸運な出来事に恵まれたと考えること。

イ 「夕焼けの翌日は晴れる。」といわれるがそのようになる確率が高いという統計があるので、夕焼けの翌日は晴れるだろうと考えること。

ウ 同じクラスに誕生日が同じ人が二人いるのは、その人たちの間に何らかの不思議な力が作用したからだと考えること。

エ 腹痛の薬になるかと思つて小麦粉を飲んでみたところ症状が良くなったので、本物の薬の代用として使い続けようと思ふこと。

〔問5〕 次は、中谷宇吉郎の随筆『立春の卵』全文を読んだ生徒A、Bの会話である。

に当てはまる適当な語句を本文中から十五字以上二十字以内で抜き出して書け。

A 『立春の卵』の著者は「卵は立つのが当り前」と述べる一方で「卵を立てるには静かなところで、振動などない台を選び、ゆっくり落ち著いて、五分や十分くらいはもちろんかけるつもりで、静かに何遍も調整を繰り返す必要がある」と述べているね。

B 卵は立つものなのか。でも、やってみるのは難しそうだな。そんなに時間をかけてまで卵を立てたいと、そもそも思わないよ。

A 著者も「卵は立たないものという想定の下ではほとんど不可能であり、事実やってみた人もなかったであろう」と重ねて述べているね。

B 「コロンブスの卵」だって、もともと「卵は立たない」という先入観があったから生まれたことわざだからね。

A 著者は「立春に卵が立つ」という中国の故事には案外深い意味がある」とも述べているよ。それは卵が立つかどうかと同時に、

「」ということを実

際検証してみる人はいないということと言いたかったんだらうね。

B 立春という特別な日だからこそという神秘的な意味を込めるのにはもってこいな故事だね。

〔問6〕

その矛盾を見抜き、たやすくだまされないための抵抗力、いかなれば免疫力、それこそが科学リテラシーを身に付けることの効能であるべきなのだ。とあるが、筆者の述べる「科学リテラシー」とその「効能」とはどのようなものか。解答欄の語句の後に続くように六十字以内で書け。

4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、本文中に引用された短歌の後には《》で現代語訳を補ってある。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A 思ひやる心やかねてながむらんまだ見ぬ花の面影に立つ

《桜の花を想像する私の心は、もうすでに花を眺めているのだろうか。まだ見えない花が面影として現れて見える。》

（鴨長明、一二世紀）

B 心こそうとくもならめ身にそへる面影だにもわれをはなるな

《あの人の心は冷淡になっていくけれども、せめて私の身に添うあの人の面影だけは、私からはなれないでくれ。》

（後徳大寺実定、一二世紀）

「おもかげ」は、西洋語の「イメージ」にほぼ相当する語で、その基本となる意味合いは、心のなかに形成された表象^{*}である。西洋哲学のなかでも、デカルトは記憶像としてのイメージを、脳髓に刻印された知覚像として理解していたから、触覚的な残像という性格がみとめられる（この場合の「触覚的」とは、肉体組織に接触している、というくらいの意味である）。右の二首はいずれも、繰り返された想いや経験が「面影」を形成した、という理解を示している。⁽¹⁾この繰り返された接触は、像を身体化し、その結果としての「面影」を、単なるイメージ以上の実体的な性格のものにしている。

そもそも「おもかげ」は、面すなわち顔を代表とするひとやものの姿

の影の意であり、「影」の概念を構成しているのも、この接触の契機である。日本語の「かげ」は複雑な語義の構成をもつ語であり、①「物陰」や「山陰」のような、遮蔽物の向こうにあつて見えない部分と、②「影」の字が充てられるもので、一方で「月影」や「火影」のように光を指す意味と、他方で「影法師」のようにshadowを指す用法が同居する、という顕著な特徴をもっている。われわれの考察では、これらの根底にある共通の意味素は「投影」であつた。特に光を意味する「かげ」を「ひかり」という類義語と比べたとき、「Ⅰ」が光源そのものや輝かしさのような光の本質的特徴を指すのに対して、「Ⅱ」は反射光や、ものの姿を映しだす作用において捉えられている、と考えられる。光かつ影という、矛盾とも言える「Ⅲ」の根本を理解するうえで重要なのは、一方を肯定的なもの、他方を否定的なものとする、西洋的（あるいは中国的）な二元論から離れることである。影を無ではなく、存在の一形態としての投影と理解したとき、月影も影も面影も一つのものとして捉える観念に到達することができる。更に、山陰もまたこれとのアナロジーにおいて解することができよう。

C 橋の蔭踏む路の八ちまたにものをぞ思ふ妹に逢はずして

《橋の影を踏んでいく並木道が四方八方に分かれていくように、私の心は乱れている。あなたに会えないために。》

（三方沙弥、七―八世紀）

橋の影は、他のいかなるものの影とも違う。それはいかほどか橋だけ

らである。橋の影がいかに橋であるのと同じように、桜の面影はいかに桜であり、恋人の面影はいかに恋人そのものであつて、それが心に付着しているのである。以上の「おもかげ」と「かげ」に関する考察について、三点を注記しておこう。まず、「かげ」は、「おもかげ」のような心理現象ではなく、純粹な自然現象だが、そこにも残像のメカニズムが存在する。また、この自然現象としての残像も、心的現象である「おもかげ」と同じように、同化の効果をもつ（橋のかげ）。更に、残像のためには投影（かげ）や射影（おもかげ）のような動きが介在している（ここでの動きのものは光である）。「かげ」――「おもかげ」のアナロジーは、かくして自然現象としての残像をも感性化し、心に同化させる。すなわち、そのような光景をここに沿うものとして、われわれはそこに愛着を覚えるわけである。

(2) この愛着において自然とわれわれとを媒介しているのは、われわれの身体性である。考えてみれば、残像、すなわち何かが残って持続するというのは、こころよりは物質の、ひとで言うならば肉体の固有性である。純粹に靈的な精神において、何かが残存し持続する、というようなことは考えられない。物語や演劇に登場する亡霊は、この世の恨みを懐きつづけている。それが無気味なのは、この恨みの記憶が、ありえないはずの肉体性を示唆するからである。物体が保存の装置であるとすれば、生命的な肉体は保存とともに遅延の器官でもある。肉体へと反響した感覚的な刺激はその動勢を鈍らせる。そのことを映しているのが、老いの感性をうたった次の稀な作例である。

D 立ちあがり野ばらの花を去らむとき老いのいのちのたゆたふあはれ
《立ち上がって野ばらの花のもとを去るとき、老いゆく我が命がたゆたう
ことをしみじみ感じる。》

(玉城徹、二〇世紀)

ここで歌人が残像の遅延を形容している「たゆたふ」も、日本人には
なじみ深い観念だが、これについては特に、自然とところとの同化の効
果に注意しておこう。蕩揺する水の動きなどを見ていると、こころも浮
遊感を覚える、という両義性である。

残像における自然とところのアナロジーは、「なごり」の観念にその
原型をみとめることができる。いまは「名残」と書き習わしているが、
「な」のもとには波の意と解されており、波の去ったあとに残る徴、変化
が世界に残した残像である。もとは自然現象だが、そこから展開して、
隠喩的にこころにも適用される。

E 夕されば君きまさむと待ちし夜のなごりぞ今も寝ねかてにする
《夕方になるとあなたがいらつしやる」と待っていた夜の名残なのだ。今
もなかなか寝られないのは。》

(『万葉集』)

F 花さそふなごりを雲に吹きとめてしばしはにほへ春の山風
《桜の花を散らした名残の花びらを雲のうちに吹きとめて、もうしばらく
あたりを彩っておくれ、春の風よ。》

(藤原雅経、一二—一三世紀)

雅経は、散る花を惜しみ、そのなごりをもとめる心持ちをうたってい
る。万葉歌の場合、世界の名残が心々にじんんでいる。恋人あるいは夫を
待っていた夜のなごりとは、部屋に残った気配であろう。しかし、その
夜、恋人は現れなかったのであるから、残っているのはつまるところ「待
つ心」にはかならない。(3)そこで、このなごりは、詠み手の肉体に残つ
た想いを指す面を濃厚にしている。言わば、(ものの)「かげ」と(こ
ろに残る)「おもかげ」を併せた両義性が、「なごり」にはある。

(佐々木健一「日本的感性」による)

〔注〕表象——知覚に基づいて意識に現れる像。イメージ。

遮蔽物——おおいをして他から見えなくするもの。

shadow——人や物などの影。

アナロジー——類推。似たところを元にして他のことも同
じだろうと考えること。

懷き——「抱き」に同じ。

刺戟——「刺激」に同じ。

動勢——動きや進展。

蕩揺——揺れ動くこと。

浮遊——水面や空中などに浮かんでただよっていること。

隠喩——比喩であることを示す語を用いずたとえる表現技法。

〔問1〕 この繰り返し返された接触は、像を身体化し、その結果としての「面影」を、単なるイメージ以上の実体的な性格のものにしている。

とあるが、これを説明したものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 何度と同じものに直接触れることで、実際に目の前になくてもその形を思い出せるようになり、実体のない「面影」を追い求める必要がなくなるということ。

イ 想いや経験の繰り返しにより、心のなかに表象が鮮やかに刻み込まれ、後で呼び起こされた「面影」が、実体があるもののように生々しく感じられるということ。

ウ 接触という実体験を経ることで、記憶のなかの「面影」が実体を持つものとなり、実体を持たない「影」や「投影」とは異なるものとして認識されるということ。

エ 心のなかに形成された表象である「面影」が、人の実際の感覚にも影響を与え、一度しか見ていないものに、繰り返し接触しているかのような錯覚を起こすということ。

〔問2〕 空欄ⅠからⅢに入る語句の組み合わせとして最も

適切なものは、次のうちではどれか。

ア Ⅰ ひかり Ⅱ かげ Ⅲ ひかり

イ Ⅰ かげ Ⅱ ひかり Ⅲ かげ

ウ Ⅰ ひかり Ⅱ かげ Ⅲ かげ

エ Ⅰ かげ Ⅱ ひかり Ⅲ ひかり

〔問3〕 この愛着において自然とわれわれとを媒介しているのは、われわれの身体性である。

とあるが、筆者がこのように述べるのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 自然現象が心にとどめられることで、われわれはそれに愛着を感じるので、愛着を感じている主体は、自然現象を残像として記憶するわれわれの肉体であるから。

イ 「かげ」は同化の効果を持たない純粋な自然現象であり、われわれ人間が心理現象である「おもかげ」に置き換えることではじめて、自然への愛着が生まれるから。

ウ 自然現象としての残像は自然への愛着から生まれるものであり、固有の肉体を持つわれわれが自然を大切にしていなければ、心に同化するということもないから。

エ 触覚的な残像が認められるのは心理現象である「おもかげ」だけであり、自然現象である「かげ」が残像として心に刻まれるというのは思い違いであるから。

〔問4〕⁽³⁾ そこでとあるが、次の各文のうち、傍線部がこれと最も近い働きを持っているものはどれか。

- ア 土曜日は都合が悪い。ただし、午前中なら少しは時間がある。
イ この自転車は性能が良い。それに、デザインも私の好みに合う。
ウ 放課後は部活動に熱中した。そして、夜は遅くまで勉強した。
エ 彼女との待ち合わせに遅れそうだ。だから、急いで駅に向かった。

〔問5〕⁽⁴⁾ 詠み手の肉体に残った想いとあるが、Eの短歌から「想い」に当たる部分を九字で抜き出せ。

〔問6〕 本文の内容と合致するものとして最も適切なのは、次のうちどれか。

ア Aの短歌は桜の花、Bの歌は恋人の姿を二度と見ることができない状況にあり、繰り返された記憶を「面影」という言葉で表現することで過去の自分への後悔を示している。

イ Cの短歌の「蔭」は自然現象だが、千々に乱れる心と、四方八方に道が分かれる風景とが重なり、心的現象と同様に残像として詠み手の心に同化している。

ウ Dの短歌は庭に咲く野ばらのみずみずしい美しさと、老いていく自分の姿とを対比させ、過ぎ去った若き日をなつかしく感じる様子が表現されている。

エ Fの短歌は桜の花が散ってしまうことを惜しみ、咲き誇った花のなごりである花びらを自分の手元に残すことで、記憶として残したいという気持ちが詠まれている。

